上毛新聞
5月10日
木曜日
発行所（〒371-8666）
前橋市古市町1-50-21
上毛新聞社
電話 市外局番（027）
（総合）254-9911
（編集）254-9933
（広告）254-9944
（販売）254-3131
（事業）254-9955
© 上毛新聞社　2012年

三陸海岸産
鳴門海峡産
新物
祝・法事に！
まぐろ
全商品放射線検査済
直売店は、いつでも10%引！
寿物産株式会社
0120-114738
通販は日・祝を除く8:30～18:30
http://www.e-kotobuki.co.jp/

鳴らない電話、販売激減

風評被害に負けない

毛の国よ ❶
第4部・有機とともに

「予約の出足が悪いね」

藤岡市内で有機農業に取り組んで22年の浦部修(61)、真弓(61)夫妻。異変に気付いたのは昨年10月中旬、新米の収穫がピークを過ぎた頃だった。

1カ月前にはコメの購入歴のある8千の顧客に案内状を出していた。例年なら10月上旬の受け付け初日から予約が入り、収穫が終わる11月に入ればファクスの注文票が殺到。1ロール100㍍の用紙が1時間でなくなることも珍しくなかった。

状況は一変した。ファクスは11月になっても入らなかった。「覚悟はしていたが、これほどとは」。福島第1原発事故による風評被害。鳴らない電話が原因を雄弁に語っていた。

安全安心で評判

夫妻が経営する浦部農園は、野生のイネの特徴を受け継ぐ古代米や大麦など、栽培に手のかかる多様な穀物を、無農薬、無化学肥料で生産することで知られる。

水を深めに張る「深水管理」と、麦、大豆の輪作を組み合わせて雑草の生育を抑える農法を確立。手間のかかる有機JAS（日本農林規格）認証もあえて取得した。安全安心の評判が評判を呼び、取引客はいつしか常連だけで3千を超えた。

顧客に支援訴え

原発事故後は、全ての作物への放射能の影響を可能な限りの精度で測定し、公表する方針を決定。6月の大麦を皮切りに、10月に農場、11月にコメ、12月には大豆が検査機関によって調べられた。コメ（玄米）7品目と大豆3品目は「検出せず」。大麦も12㍍で、検査方法によっては、「検出せず」となるレベルにとどまった。

それでも顧客は西日本産のコメや10年産の古米に向かった。常連が大半だった。

「食に対する意識の高い方たちだから」。理解はできても、やるせなさが募った。震災の影響でコメ不足が懸念され、市場に流通するコメの価格は全国的に上昇する中で、有機米だけがそっぽを向かれた。

例年なら収穫の半分を売り切る10～12月だが、11月上旬の段階で販売量は前年の2割。夫妻は次世代育成のために雇用していた研修生のうち、介護の資格がある1人に打ち明けた。「農園が危ない」。研修生は農園を去った。

「原点」つづる

「いま一度、農園を支えてください」

農園の縮小や廃止も現実味を帯びてきた11月下旬、夫妻は常連客に放射能の測定結果と農園の窮状、原発事故に負けたくないという気持ちを伝える文書を送った。

「1㍍未満でもいらないというのが消費者の選択なら、TPP（環太平洋連携協定）導入を待つことなく日本の農業は息絶えてしまいます」

要請文により多くの人が、農園を含む有機農業者が窮地に立っていることを知った。「手紙を見て胸が苦しくなった」「自分の行動が農園をそこまで追い込んでいるとは」。余白にメモが書かれた注文票が届くようになった。

夫妻が常連客に送った封書には、要請文のほか、小さな文字が裏面までぎっしり詰まった1枚の手紙が入っていた。手紙には、夫妻が有機農業を始めた原点がつづられていた。

（敬称略）

第4部は藤岡市で有機農業に取り組む浦部農園を通し、有機農業の現状と可能性、担い手を育てる上での政策的な課題などを検証します。

藤岡市で無農薬、無化学肥料の農業を実践する浦部夫妻。風評被害との闘いを余儀なくされているが、青々と成長した麦を前に思わず顔がほころぶ

ジュニア俳壇は⑩面

朝の一句

妹と　好きな歌連れて　春の道

（高崎中尾中3年　海老沼　りほ）

☆携帯音楽プレーヤーに好きな歌を入れて、聴きながらの春の散歩。妹との散歩に、好きな歌にも春の景色にも心が浮き立ちます。（佐）